
怨恨の崇拜者

中野南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨恨の崇拜者

【Nコード】

N2160W

【作者名】

中野南北

【あらすじ】

人に捨てられた少女は、鬼に拾われた……。
決して親しまない二つの種族は、何百年もの間、対抗姿勢を崩さなかった。その深く、大きな亀裂に、鬼に育てられた一人の人間が立ち向かう。

1 鬼の住む島

背の高い樹木が立ち並び、湿った地面を覆う落葉が草花を育てる。涼しく爽やかな森の空気が、島全体に独特な木の香を漂わせていた。

人間の文明を感じさせない孤独な緑の島に、少女は一人、仰向けに倒れていた。身に纏った赤い上等な衣や、黒くて光沢のある髪が土で汚れる事も気にせず、微かな呼吸で胸を上下させ、広い島の森の中でも、一際大きな巨樹を虚ろな瞳で見上げている。

歳が十にも満たぬ彼女は、非常に衰弱していた。

三日前。先日から降り続けている豪雨と激しい強風が吹き付ける中、海は大きな波を幾つも生み出し、狂った怪物のように暴れ続けた。

そんな嵐の中を、巨大で金や銀の装飾が幾重にも施された豪華な船が、遠く離れた島国から、この緑の島へと四日掛けて遣って来た。

船は波のうねりでひどく揺れながら島の海岸沿いに止まり、錨も下ろさずに、幼い少女を一人岸边に下ろすと、さっさと針路を転回させ、逃げるように荒れる海へと帰って行った。

一人で孤独に残された少女は強風に煽られ、冷たい雨と波飛沫を全身に浴びながら、自分を置いて波に揺られて去る、大きな船をその姿が彼方に消えるまで、寂しげな眼で眺めていた。

船の姿が見えなくなると少女は膝から崩れ、濡れた髪や衣を風になびかせながら、その場で声を出して泣き始めた。強く吹く風も冷たい雨も気にする余裕が無いようだ。

少女は長い間うずくまって、涙を流し続けた。

嵐が去ったのはその日の昼頃だった。強く吹き付けていた風や激しく降っていた雨は嘘のように静まり、温かな太陽が空に現われている。しかし、島を取り囲む海だけは未だに荒れ狂い、幾つもの波が激しくうねっていた。

少女は髪から滴る水滴を袖で拭いながら、濡れた衣を不快に思いつつ、涙が枯れ果てた瞳で青い空を見上げていた。

そしてゆっくりと立ち上がると、海岸からこの島の大部分を占める広い森へと足を進めた。何か食べられそうな物を探そうと考えたのである。

この島の森は、眼を見開くほどに美しかった。

力強く立派に立っている何本もの大木。それらが枝に付ける青々とした葉には、先程の雨の水滴が太陽の光を反射させ、きらびやかに輝いていた。

独特な木の香りが森中に漂う。湿った地面や落ち葉、折れた枝の上を歩く感触。

名前も分からない花々や動物達、虫はあまり好きではないが、少女はそれ等全てを好奇心旺盛に、楽しそうな表情で体験し、眺めた。

しかし、心に残る大きな不安と悲しみを、誤魔化しきる事は出来なかった。

夕暮れ時、少女はようやく、食べる事が出来そうな植物の実を見付けた。森の中でも特に大きな巨樹の周りに咲いている植物で、桜桃のような赤い実だ。

少女は実を一つ植物からもぎ取ると、少しだけ前歯でかじってみた。途端に、ひどい苦みと舌が痺れるような渋みが口の中に広がり、少女は慌てて吐き出した。

それから、数分もしない後である。少女が口の中に残る渋みを不快に感じて困っている、突然、体が重くなる感覚に陥り、立っていられなくなった。ひどい吐き気と、燃えるような頭の痛みが少女を襲い、その場で遂には倒れてしまった。

赤い実には毒があるのだと、少女が了解した頃には、最早指一本動かすことも出来なくなっていた。

以来この三日間、少女は動く事が出来ず、巨樹と赤い実を付けた植物の側ですっと横たわっている。その間に、随分と衰弱してしまった。

ひどい苦しみの中で、少女は走馬灯のように自分の人生を振り返りながら、静かに意識を失った。

ふと気が付くと、少女は誰かに呼び掛けられていた。深い闇の中から、落葉や湿った地面の上に横たわっている感覚が戻ってきたので、ゆっくりと瞼を開けた。

そこには背の異様に高い、頭に2本の角を生やした、青い目の男が立っていた。男の鼻と耳はやけに尖っており、口に生える歯や手足の爪は凶器のように鋭い。

彼は酷くしわ枯れた声で『気が付いたか?』と、横たわる娘を見下ろしながら尋ねた。

唐突に、少女は自分の体がとても楽になっっている事に気付いた。疲労感は未だに強く残っているが、赤い実が与えた影響であろう、頭の痛みや吐き気などは嘘のように治まっている。

『人間がここにいる理由を、是非とも聞いてみたいものだ』

男は猜疑心を含んだ声音で、低く言った。

少女はその時、たくさんの疑問が心の中に浮かぶのを自分で感じた。

船を下ろされた時、この島には誰もいないと聞かされていたのに、何故人がいるのだろうか。

それに、男の姿は普通の人間とはとても思えない。角は生えているし、爪や歯は鋭く瞳は青い。顔には古傷が幾つもあり、身に纏う衣も見たことの無い生地で出来ている。その上、声は聞き取りずら

い程に低くしわ枯れていた。

そして一番の大きな疑問点は、あれだけ苦しかったのに、何故自分の体がこれほど楽になっていっているのかである。もう、自分は助からないと思っていたのに……。

少女は黙って横になったまま、驚いた表情で男を見ていると、彼は体を屈め、そこに生えている赤い実を一つ採った。

少女はその実を恐れて体を起こし、フラフラしながら後退った。

『鬼狂いの実だ。我々鬼ですら、これを少量食うだけで死ぬ。お前は運が良い。私が丁度、解毒薬を持っていた』

男は空の薬瓶を少女にふっで見せながら、幼子に諭す様なゆっくりとした声で言った。

少女は目の前で薬瓶をふっで見せている異様な男が、自分を助けてくれた恩人であるという事と、彼が鬼であるという事を、ようやく理解して簡単に受け入れた。物事を疑う事を、少女は知らなかったのである。

少女は覚束ない足取りで、姿勢を良くすると、鬼に向かって御辞儀をしながら礼を言った。

「た……助けて下さって、有り難うございました」

鬼は体を屈めたまま、衝撃を受けた様な顔をした。その表情に、少女は自分が何か悪い事をしたのだろうかと不安になった。

『お前、私の言葉が分かるのか?』

鬼は表情を固めたまま言った。どうやら鬼は、理由は分からないが、少女には自分の話す言葉が分からないだろうと置いていたらしい。

確かに聞き取り辛い声ではあるが、意味ははっきりと伝わる。少女は少し訝しく思いながら、こくりと頷いた。

『そうか』

鬼はそう言うと、静かに立ち上がった。やはり背は相当に高く、少女の三倍はあるだろう。

『人間を恨むか? 人間よ』

鬼は少女に向き合うつと、表情を崩さず唐突に低いしわ枯れた声で言った。

少女は質問の意図が分からず、黙って、鬼の厳しい表情を見上げていた。すると、もう一度鬼は同じ言葉を繰り返した。少女は一考した後、はっきりと言った。

「恨みません」

すると、鬼は間髪入れずに少女を怒鳴った。鬼気迫る表情である。

『何故恨まぬ。お前は、人間の生け贄であろう? お前は奴等に希望を与えたのに、奴等はお前から全てを奪ったのだぞ!』

牙を向けて言う鬼に、少女は激しく怯えながら、くらくらする頭を抑えて呟いた。

「み……皆……泣いてたから……」

鬼はまた、更に衝撃を受けたように、古傷だらけの顔を一層歪めさせた。彼の心の中でおきている葛藤を少女は知らず、鬼の表情の変化を不思議そうに見上げている。

強い風が吹いた。大木の枝に付いた青い葉や地面に落ちた枯れ葉達が宙に舞う。冷たい風が、少女と鬼に強く吹き付けた。

1 鬼の住む島（後書き）

始めまして、南北です。

読んで頂いた方は分かると思いますが……かなり拙い文章＋分かり
難い表現。

すみません、素人です。書きなれてない様子がひしひしと伝わりま
すな。

何にせよ、読んでくれたアナタ、感謝です。

2 人間の娘

広大な森林に囲まれたある里がある。家や湯屋、学び舎などの建物が建てられ、田園や牧場などがいくつも設備された、広い広い里がある。その風景は何も妙なところなど無い、人が住むには当たり前前の光景が広がっている。

しかし、その里に住む人々には皆、頭から角が生えている。加えて男も女も異様に背が高く、それに合わせて建物の入り口から小部屋まで、全てが天井高く造られている。彼等が話す言葉も、人間の世界では話される事の無い珍しい言語だ。

そう、ここは鬼人の島。高い知能と強い力を持ち、自然を愛する種族の島。

学び舎の卒業を1ヶ月後に控えた二月の初め。里を囲む森も天井の高い建物も、硬い土の地面も全てが雪によって白く染められ、辺りに色を残す事を強く拒んでいた。

そんな白一色の世界で、鈴音と言う名の少女が、これ又白い衣を着て雪が振り積もる笠を被り、新雪が堆積する地面に足跡を付けながら歩いていく。

彼女はこの里に住む大半の鬼人よりも背が遙かに低く、笠の下には角も生えていない。鋭い牙も無く、赤鬼が青鬼かをその色で見極める瞳の色も黒だった。

鈴音は、人間なのである。この島に住む唯一の人間だ。

十年前、この島の森で死にかけているところを、青鬼のレインという薬調合師に救われたのだ。行く宛の無い幼い少女を、レインは放って置く事が出来なかった。種族の間にわだかまりがあるにも関わらず、里の長老である青鬼の御爺様に許しを貰い、自分の息子・リアンと、人間の捨て子・鈴音を男手一つで育ててきた。

鈴音とリアンは、先月十六歳になったところである。来月には十年通い続けた学び舎を卒業し、二人共成人となった後は薬調合師になるつもりだ。

しかし、鈴音にはある重大で、大切な夢があるのだ。誰にも話した事は無いが、自分にとっては何よりも優先したい大切な夢だ。

雪が止み、鈴音は立ち止まって頭から笠を取った。笠の上に積もった雪が、小さな音を発して真っ白な雪の地面に落ちる。

『困ったな……』

鈴音は小さな声で、鬼の言葉を使って独り言を呟いた。

『何が困ったんだ？』

唐突に、誰かが言った。鈴音はビクツとして急いで周りを見渡す。声の主は鬼犬であった。真っ白な毛で、雪に同化するように鈴音の数歩左にいた。

『ビックリしたあ……。君は……。アンおばさんの所の子だね。ええっ

と、名前は……』

『アードだよ。それで、何が困ったんだ？ 人間』

アードと名乗った鬼犬は、ピンと立てた耳の横にある角を誇らしげに立てて、気取るような調子で言った。

『鈴音って呼んでよ。何に困ってるかは、君に教えたら広まりそうだし……言わない』

悪戯っぽく笑いながら鈴音は話した。アードは少し怒った口調で、鈴音の腰程まである立派な体軀を見せながら言った。

『忘れたか？ 我等の言葉は鬼人には通じん。何故お前に通じるのか知らんが、オレが鬼人に話した所で、吠えてるだけだと思われて意味は通じんだらう』

鈴音はその言葉でハツとした。そうだった。人と犬が話せないのと同様に、鬼人と鬼犬が話せないのは当たり前だ。鈴音には、変わった才能があり、相手が鬼の種族ならどんな言語でも、意味を持って伝わるのだ。当たり前でない事が、当たり前前の事だと思ってしまうた。

『ごめんね……そうだった』

アードは、苛々している様子を隠そうともせず、唸るように言った。

『あゝあ。だ・か・ら、何が困ったんだ？』

大きな鬼犬に唸られて少し怖がりながら、鈴音はようやく話を話し始めた。

『わたし、もう直ぐ学び舎を卒業するんだけど、薬調合師以外にね、やりたい事があるの。あ、薬剤師には、レイン叔父さんから知識は受け継いだし、昔からなりたい職業ではあるんだけど……』

アードは黙って聞いている。

『でもわたしには、どうしてもやりたい事があってね。それが……そう……鬼人にとっては、許されない事だと思うの……。だから、誰にも言い出せなくて……』

鈴音はそこで黙り込んでしまった。また雪が降り出したというのに笠を被ろうともせず、俯いたまま動かないで突っ立っている。

『鬼人の事情か。それで、その夢ってのは何だ？』

アードが興味有り気に尋ねると、鈴音は困ったように笑って、小さな声で呟いた。

『人の世界に行く事』

立派な体躯の鬼犬は、驚いて口を開けた間抜けな表情をして言った。

『そ……それは不味いだろう、人間……』

鬼人と人間が友好的な関係を築いたとされるのは、信頼できる資料で二百年程前の事である。

では、それから2つの種族はどうなったのか？ 答えは、大きな戦乱がつい三十年程前まで行われていた事を考えれば分かる。鬼人と人間の関係は、最悪であった。

百年以上続いた争いは、両者に大変な数の犠牲者を出した。怨みは強まり、感情の限界を幾つも突き破りながら、修復不可能な程に互いが互いを憎み合った。

戦乱に終止符を討ったのは、遂に戦いの限界を迎えた鬼人達の逃亡によるものだった。鬼人だけではなく鬼の種族全体は、鬼人を中心に故郷の巨大な大陸を捨ててバラバラになりながら、各々小さな島に、人間から見つかからないようひっそりと暮らす事にした。この緑の島もその中の1つである。

『そんな歴史があるのは、温室育ちの鬼犬であるオレでも知っている。鬼人は皆、例外なく人を恨んでいるぞ。お前もよく知っている筈だ。人間』

アードは『人間』を特に強調して、重々しく言い放った。鈴音はその言葉に頷いて、顔を僅かにまた俯かせた。雪が黒い髪や細い肩に積もってしまったている。

『何故、行ってみたいと思う？ やはりここは、お前にとっては孤独か？』

『うっん……。違うよ。わたしは……』

言い掛けた所で、『アードちゃん』と呼ぶ甲高い声が聞こえた。アードは『主人だ！ やべえ！』と言って、凄く速さで走って消えた。体毛が白い為、その姿は直ぐに見えなくなってしまう。

『あら！ 鈴ちゃん！？ 雪に埋もれちゃうわよ！』

近所に住むアードの飼い主、アンおばさんが甲高い声で言った。青い瞳で角が二本頭に生えている。幼い子供が2人いてやはり背は高く、鈴音の全長は、アンおばさんの胸の辺りしかない。鬼山羊から取れる柔らかかな毛で繕られた、ふわふわの上着を羽織っている。

アンおばさんは鈴音に積もった雪を、分厚いその手で払って、手に持っている笠を引ったくり無理やり被せた。

『美人さんが風邪でも引いたら大変よ。来月は卒業の式があるのだし、大事な時期でしょう』

このお節介さが、アンおばさんの良いところだ。レインおじさんの妻は早くに亡くなっているので、鈴音は彼女を母親のように感じて育ってきた。

『そうだ、鈴ちゃんは卒業した後どうするの？ 鈴ちゃんは賢いからねえ。ウチの子見てご覧、あれや、駄目だよ。リアン君も良い男になったし、レインさんは子育てが上手いねえ』

『いえ……そんな……』

鈴音が謙遜しかけた所で、『見付けてみる！』という挑発の音が聞こえた。多分、アードがおばさんに向かって吠えたのだろう。おばさんにはただ鬼犬が吠えた声が聞こえただけで、自分の飼い鬼犬

が自分を挑発しているなんて夢にも思っていない筈だ。

おばさんは当初の予定を思い出して、叫ぶように大きな声で言った。

『アードちゃん！ 何処にいるの！？ 鈴ちゃん、またいつかね！』

鈴音は、アード並みの素早さで視界から消えたおばさんに向かって、『さよなら！』と叫び返して、まだどこか温かみのある笠を被り直した。

人間を恨んでいるはずの鬼人でも、わたしと親しくなれる…。

なら、いつまでも続く、この二つの種族間での亀裂だって、埋め直す事が出来るんじゃないだろうか……。

わたしが、人の世界に行けば、鬼人も人間も、互いに誤解する事なく、仲良く過ごして行けるように、変えられるのではないだろうか…。

これが、鬼に育てられた人間である、鈴音の夢であった。

2 人間の娘（後書き）

漸く一歩、話が進んだ感じでした。

小説書くのは思いの他疲れますね……。

読んで下さったアナタ、感謝です。

3 赤鬼の悪意

鬼人は身体形質の特徴によって、二つの種類に分類する事が出来る。

一つは青鬼。瞳の色が青く頭に二本の角がある。もう一方は赤鬼。瞳は赤く頭には一本の角があり、青鬼に比べて、牙や爪が鋭い。その上、身体能力がとても高く性格も凶暴で暴力的だ。

二種類の鬼人達は、基本的には互いを尊重し合い、争う事もなく平和に過ごしている。……が、種族間での問題事が全く起こらないという訳では無い。それがどんな事かと言うと、人間の事である。

赤鬼は人間を皆、滅ぼすべきだと考えている。これは、赤鬼が元来好戦的な性格である事と、戦争の最前線で戦っていた故、人間との戦いを目の前で見てきた結果生まれた考え方だと思われる。一部では人間との戦争を再び望む者までいるらしい。一方、青鬼は人間と関わる事それ自体を止めようと考えている。

この意見の違いが僅かながらにも、二種類の鬼人達に亀裂を作っているのがあった。

鈴音は、アンおばさんに別れを告げた後も雪の中を歩き続けていた。土の上に新しく降り積もった白い新雪は柔らかく、一歩進む毎に足が膝まで沈み込む。とても歩きづらい道で、鈴音は体力を激しく消耗させて呼吸を荒くしていた。

暫くそう歩き続けていると、里を取り囲んでいる広大な森へと向かうために作られた、森への入り口に辿り着いた。重たそうな雪を乗せた、背の高い樹木が何本も立ち並んでいる。森の中にまでは入れないが、ここには薬の材料となる植物がたくさん生えているのだ。今、その植物達は厚い雪に埋もれていて採る事は出来ないが、背の高い樹木から雪と共に落ちた実は、冷たい雪の上に、無造作に転がっている。鈴音はそれらの木の実を採りに来たのである。

雪が降る中、鈴音は木の実がまばらに落ちている樹木の下まで歩き、そこに屈み込むと、積もった柔らかな雪を素手で掻き出した。それ程深く掘らなくとも、直ぐにたくさん木の實が出てくる。黄色い小さな硬い実で、烏眼の実という胃腸薬の材料になる実だ。

鈴音は烏眼の実を、事前に持ってきた青い布の袋に入るだけ入れた。その後、しっかり袋の口を紐で締めて自分の懐に仕舞った。

用事を済ませた鈴音は、元来た道を帰ろうと立ち上がった。すると突然に、大きな笑い声が聞こえてきて、鈴音は何事かと驚き辺りを見渡した。自分の十歩ほど前に、瞳が赤く頭に角が一本生えている、三人の男の赤鬼が、笠も被らずに横に並んで立っていた。鈴音の同級生で唯一の赤鬼達であり、はつきり言っただけ嫌われている連中である。

『やあ、人間。僕等の縄張りでは何をしているのかな？』

真ん中に立つ、一番背の低い赤鬼が気取った調子で言った。

『縄張りって……ロラン、いつから森の入り口があなた達のものになったのよ？』

鈴音が怒った口調で不快気に言うと、向かって右側に立つ、酷く太った角の短い赤鬼がどもりながら声を荒げて言い放った。

『□…… □ダン様にえ……偉そうな…… □き……聞くな！』

鈴音は相手のどもった声を何とか聞き取り、『はあ』と溜め息を漏らしてから、呆れたように言った。

『分かったわ、ドリー。いつから、森に繋がる道は、貴方様方の物になったのですか？』

ドリーと呼ばれた赤鬼はそれを聞いて、満足した様にフンと鼻で笑った。□ダンという小さな赤鬼も、偉そうに腕を胸の前に組んでほくそ笑んでいる。ただ、向かって左側にいる、随分と細く背の高い体型の赤鬼は、表情を一切崩さずに、ずっとしかめっ面をしている。

『いつからここが僕達の縄張りになったか……言ってみてやれレイピア』

□ダンがニヤニヤしながら威張り口調で言うと、レイピアと呼ばれた背の高い痩せた赤鬼が、急に驚く程大きな声で吠えるように叫んだ。

『いつからだ！？ ここは鬼人の島だ！ お前は人間だろうが！
最初からこの島は俺たちの物だ！』

鈴音はあまりに大きな声に、耳を塞いで迷惑そうな表情をした。赤鬼に何を言われても大抵の事なら気にしないが、レイピアのその言葉は鋭い刃のように彼女の心を貫いた。人間と鬼人との間にある深い亀裂は、永劫消え去る事が無いのだと、鈴音は告げられた気分

になったのだ。

『長には……許して貰ったもの……』

心の傷を三人の赤鬼に悟られぬ様に、強い口調で言っただけだった。しかし三人は鋭く、鈴音の動揺に気が付いた。ロダンが不快にヘラヘラ笑って言いつのる。

『人間は敵だよ。僕達の故郷を奪って、偉そうに生きている。これ以上何を奪う気だい？ 人間！』

鈴音は益々傷付いて、肩を窄めた。自分が罵倒される事より、永遠に修復出来そうにない、種族間の関係をはっきり示される事が辛かった。

『それにー』

『女子相手に三人がかり！ 笑止千万！』

ロダンが続けて言おうとした時、それを遮って、聞き覚えのある声が唐突に響いた。その声は鈴音にしか聞き取れない鬼動物の言語だった。

『お……鬼猪だ！』

ドリーが鈴音の後ろをずんぐりとした指で差しながら、とても恐れた調子で言うと、鈴音の背後から、雪の上をノシノシとゆっくり歩く、巨大な鬼猪が現れた。鬼猪は、鬼人の誰よりも大きい、ピンと立った耳の両横にある角がたくまし気な、誇り高く気高い種族である。

『お久し振りです、鈴音さん。凄い雪ですね』

鬼猪は巨大な牙を揺らしながら、鈴音の身を庇うように半歩前に出て丁寧と言った。鈴音が『うん……久し振り』と返事を返すや否やに、レイピアがまた大きな声で叫んだ。鈴音はとっさに耳を塞いで、口をつぐんだ。

『汚らわしい獣が！ さっさと森に帰れ！』

ロダンもドリーもそれに勇気付けられたのか、若干の躊躇いを見せながらも鬼猪を罵倒し始めた。

『黙らっしやい！！』

鬼猪の一声で、三人の罵倒は掻き消された。鈴音以外には、鬼猪の言葉は巨大な獣が激しく鳴いているように聞こえる。相当に恐ろしいものだったのだろう。三人の赤鬼は顔面を蒼白にして、『ヒイ』と情けない声を出すと、一斉に逃げ出した。

『馬鹿な子供達だ』

鬼猪がため息混じりに呟く。鈴音は雪が積もった笠を頭から取り、頭を下げて礼をした。

『有難う、カイナ。暫く会わない間に大きくなったね』

鈴音のその言葉を聞いて、カイナという名の鬼猪は慌てて言葉を返した。

『頭など下げないで下さい。あの時私の命を救って下さった恩。悪ガキ共を懲らしめたぐらい、何という事もございません』

あの時というのは、五年前の事である。鈴音が森の中で薬草を探している時、森の中腹で、強い毒に当たったらしい鬼猪が倒れ、苦しんでいた。鈴音は既に大抵の解毒薬を作る技術を持っていたので、鬼猪の命を即席で作った薬で救ったのである。その鬼猪がカイナであり、それから、恩を大切にしている鬼猪達種族は、鈴音を良く慕っているのだ。

『ううん。でもお礼は言わせてね』

まだ、赤鬼三人組に言われた事を気にしつつも、鈴音は無理矢理に作った笑顔で丁寧に言った。

『恩人には、悲しい思いをしてほしくないのです。あの者共に何を言われたのか存じませぬが、気にしないで下され』

『恩人には、悲しい思いをしてほしくない……』

鈴音はカイナの言葉を繰り返した。不意に、頭には自分の夢をレインおじさんに告げた時の、おじさんの失望が想像された。

『どうか、なさいましたか……？』

カイナが大きな顔を鈴音に向けながら不安気に尋ねた。鈴音はハッとして、顔に微笑を作って話した。

『大丈夫。わたし帰るね。有難う、また会おうね』

枝に積もった大きな雪の塊が、音を立てて地面に落ちる。鈴音は、カイナの疑念を含んだ視線を背中に感じながら、笠を被り直して雪が舞う中を再び歩きだした。

3 赤鬼の悪意（後書き）

週一は中々難しい……。ミスが多々あると思います。指摘して頂ければ幸いなのですが、取り敢えず内容が分かる程度にはしたつもりです。

読んで下さったアナタ、感謝です。

4 未来への葛藤

「……わたしは、これからどうやって生きていけばいいのでしょうか……？」

幼い少女が、森に舞い落ちた葉や細い木の枝の上を歩きながら弱音を吐いた。辺りは既に薄暗くなり、一緒に並んで歩いている背の高い鬼が、少女を一瞥もせず、ただ前を真っ直ぐ見つめて低い声で答える。

「人間としてのお前は死んだ。今からお前は、鬼人として生きるのだ」

森を抜けて広い里が見えた。樹木のない風景を、少女は久し振りに眺めた。

木造の建築物が立ち並ぶ島の集落に、二百人程の鬼人達が住んでいる。皆それぞれの職に見合った生活をしていて、裕福とは言えないまでもそれなりに安定した暮らしをしていた。立てられた鬼人の家々はどれも天井が高く造られていて、一軒一軒が異常に大きい。全ての家が築三十年ほどなのだが、それよりも遙か昔から建てているかのような趣きがある。自然と共に生きる鬼人達は、自分の家の庭に多様な植物を育てる事も忘れない。

鈴音は漸く自分の住む里に着き、叔父さんとリアンと共に、三人で住んでいる我が家に帰ってきた。家は二階建てで、部屋は全てを合わせると十もある、鬼人にしては大変に広い家屋だ。

鈴音は鬼人の為に造られた、人間にしてみると大き過ぎる玄関の戸を開けて言った。

『ただいま!』

すると、いつも通りの気だるそうな低い声で、居間の方から返事が返ってくる。

『お帰り〜』

あの声はリアンのものだ。昼寝でもしていたらしく、声はつきりとしていない。鈴音は笠と長靴を脱いで、雪に濡れた髪と衣を布で拭きながら、声のする居間に向かった。

『リアン……おじさんは何処にいるの?』

鈴音は、居間で寝っ転がって読書をしているリアンに向かって尋ねた。リアンは、おじさんにそっくりな顔を鈴音に向けて、眠そうな青い目を手で擦りながら答えた。

『薬草をアンのおばさんに届けに行った。犬を追っかけて、転んだらしいぜ』

リアンは言いながら笑っている。

『笑っちゃ駄目でしょう……』

鈴音は呆れた声で話した。

『親父に何か用でもあんのか？』

リアンがゴロゴロと寝返りを打ちながら、別段興味も無さそうに尋ねる。

『鳥眼の実を採ってきたのと……後……』

鈴音は言いながら口籠もった。すると、リアンは鋭く瞳を光らせ、突然厳しい声で言い放った。

『ロダンに何かされたか』

リアンは勘が鋭く、嘘が通用しない。鈴音は焦り、慌てて言葉を返した。

『別に、大した事はされてないよ。それに、おじさんと話したい内容は、もっと重要な話……』

『やっぱり、何かされたんだな？ あいつ……今度会ったら……』

『争わないでね、リアン。わたし達、もう直ぐ大人になるんだから……』

学校を卒業したら、成人になる。大人の鬼人が守る法には、争いを起こした者を厳しく罰するように定められているのだ。あの三人のせいでリアンが傷付く必要はない。

『わたしは全然大丈夫。お昼ご飯作ってあげるね。何がいい？』

鈴音はパツと笑顔になって明るく言った。その言葉に、リアンは

渋々といった様子で返事をして、それ以上赤鬼達については追及しなかった。

『ねえ、リアン。もし……もしもだよ。薬調合師以外になりたい夢があつて、それがとても難しい事だったら、どうする？』

鈴音が唐突に、リアンに頼まれて作った鬼魚の照り焼きと米を二人で食べながら尋ねた。リアンは腹が減っているらしく（大方朝食でもぬいていたのだろう）、凄い勢いで昼食を食べながら聞き返した。

『どうするって？』

『叔父さんに言うか……諦めるか……』

リアンは食べるのを止めて暫く真剣に考えた。それから少し時間を置いて、彼にしては珍しく真面目な声で言った。

『そうだな……俺はそんな事考えた事もないが、よっぽどそれが大切な夢なら、親父に言うだろうな。今すぐにも……』

鈴音は俯き、『今すぐにも……』とリアンの言葉を繰り返した。

『鈴音。お前がどんな事を考えているのかは知らねえ。だがな、お前が何かを悩んでいるのは俺も親父も知っている』

その言葉に鈴音は驚いて、リアンの顔を真っ直ぐに見た。リアンは微笑んでいる。

『悩み事ってのは、俺はてっきり赤鬼絡みの事かと思ってたんだが、成る程な、職の事で悩んでたのか』

鈴音はその言葉に、『例え話だつてば……』と小さな声で呟いたが、リアンはそれを無視して続けた。

『親父は別に薬調合師になれって命令した訳じゃないだろ？ 他に考えがあるなら、遠慮無く言ってみたらどうだ？』

鈴音は僅かに首を縦に振った。しかし、リアンは知らない。鈴音の夢が、人間との関係を深める事だという事を……。その為には、この鬼人の島を出て、人間の土地に行く必要があるという事も……。言おうとしたが、躊躇してしまい、タイミングを逃して結局話せなかった。

その日の夜。おじさんはアンおばさんから貰ってきた大量の果物を鈴音に渡して、低いしわ枯れた声で

『リアンにも分けてやれ』と言うと、さっさと薬草調合部屋へ行っってしまった。自分の夢の事を言い出すどころか、烏眼の実を渡す暇さえ無かった。

(このまま言い出す事も出来ずに、夢を忘れて年老いていくのだから……)

鈴音は晚ご飯の時も隣に座るおじさんに言い出す事もせず、暗い気持ちのまま、自分の意気地のなさど心の弱さにひたすら嫌悪感を抱いた。

鈴音は眠る直前、自分に与えられた十畳の部屋で布団に包まって、叔父さんと出会った日の事を思い出していた。深緑の森の中、叔父さんは今も変わらない古傷だらけの顔で、鈴音に何度も繰り返して言っていた。

『人間の事は忘れるのだ』

叔父さんは幼い頃に人間の手によって、自分の住んでいた村を破壊された。その時、家族も友達も皆殺されたらしい。常人以上に人間を恨んでいるはずだ。だと言うのに、人間である鈴音の命を助けた理由は、誰にも分からない。もちろんそんな事を本人に聞けるはずもないので、鈴音は心の中で時々疑問に思う事しか出来ないのだが……。

『おじさんは人を嫌ってる……』

鈴音は布団の中で、小さな声で呟いた。人の世界に行きたいなどと言ったら、絶縁されるかもしれない。しよせんお前は人間だったのか……と暗い声で言う叔父さんを想像した。そんな事を言う人ではないと分かっている、黒いイメージが止めることも出来ずに湧いてくる。

『どっしりどっしり……』

卒業まで後一ヶ月。時間は止まる事無く、流れるように進んで行く。

鬼人と人間が仲良く過ごせる未来を、思い続けて何年経つだろう。歴史を学べば学ぶ程、叶わぬ願いだと感じてきた。それでもこの夢は消える事無く、心の中にあり続ける。

その日に鈴音が見た夢は、不思議なものだった。とうに忘れ去った筈の、家族の夢だったのだ。豪華な船に乗せられる直前、見たこともないような上等な衣を、母が着させてくれている。

「あなたは、これから天国に行くのよ……」

母は泣きながら、鈴音の着物を帯で結んだ。鈴音は涙で濡れる母の顔を、寂しそうな顔で眺めている。隣には、厳格そうな顔をした父がいた。悔しそうな表情をした四つ年上の兄もいる。たとえ夢であろうと、人を見たのは……家族を見たのは久しぶりだった。

鈴音は夢の中の家族の顔を見渡して、考え直した。

（わたしは、何と言われても人間なんだ……。鬼人に育てられた、人間だ。決して鬼人になりきる事も、人を忘れ去る事も出来ないんだ。でも、だからこそ、出来ることがあるはずだ……）

次の日の朝、鈴音は寝巻きのまま自分の部屋を出ると、叔父さんの部屋に小走りで行った。戸を二度叩くと『いいぞ』という低いしわがれた声が返ってきた。鈴音は戸を急いで開けて、部屋の片付けをしているおじさんの後ろ姿を見つめて言った。

『全部、お話します』

たったこれだけの言葉に、叔父さんは片付けをしていた手を止め、鈴音のほうを見て滅多に見せない笑顔を作った。

『待っていたぞ。さあ、話せ』

二人は向かい合って座り、話し始めた。

4 未来への葛藤（後書き）

展開が唐突なんですよね……。修行（書く量）が足りなくて、どの程度詳しく書けばいいのか未だに分からない……。読んで下さっている方、有難うございます。

5 宝の言葉

冬の早朝。暖炉に火をつけて間もないおじさんの部屋はとても寒かった。吐く息は白くなり、薬草の独特な香りが漂う部屋の中を鈴音は寝巻きのままで、おじさんと向かい合って話しを始めた。

『わたしに悩み事があるのは、既にご存知なのでしょう？』

鈴音は一言一言重々しく、ゆっくりと切り出した。おじさんは目を瞑って腕を胸の前に組み、胡坐をかいた体勢で鈴音の言葉に頷いた。

『わたしが悩んでいる事は、卒業した後についてです。このまま何事もなければ、わたしは薬剤師になって、一生この島で働いて、老いていく事でしょう』

おじさんは黙って微動だにせず、話を聞いている。

『でも、わ……わたしには、薬剤師になる以外の夢が……あるので』

鈴音はそこで、俯いて黙り込んでしまった。ああ……なんて自分は意気地がないんだろう……。

おじさんは片目を空けて、鈴音の様子をちらつと確認すると『続ける……』と静かな声で促した。

鈴音はおじさんの声を聞くと、不思議に勇気が湧いてきた。勇気付けられた鈴音は『はい』と言って、真っ直ぐにおじさんの顔を見

つめ直した。

『夢と言うのは、わたしが幼い頃から度々思い描いていた、一種の希望と可能性です。わたしの特別な生い立ちを利用する事が出来るのではないかと、考えています』

鈴音は一拍おいて、思い切って言った。

『人間と鬼人との関係を最良のものに、したいのです』

おじさんは両目を開いて、しかし、黙ったまま、何を思っているのか、鈴音の顔をジッと見ている。

『長い歴史の中で、二つの種族の関係が悪くなってしまっている事は、学校で習いました。たまたに、人間であるわたしを見る眼が冷たい鬼人もいます。鬼人の皆が人間をどれ程恨んでいるのか、よく分かっているつもりです』

鈴音はおじさんの様子を気にしつつも続ける。

『それでも、恨みあう関係が続くのは、もう終わりにして欲しいのです。わたしは自分が鬼人のつもりで、今まで生きてきました。これからもそうです。でも、人間である事実を変える事は出来ないんです。どれほど強く望んでも、それは変えられません』

『だから、お互いが恨み合う姿を見ているのは、とてもつらいんです。鬼人の皆は……全員とは言えませんが、わたしを受け入れて下さいました。でも、そんな優しい皆を、わたしと同じ人間は恨んでいるのです。皆も人間を恨んでいる……。この何時までも続く連鎖を、もう終わりにさせたいのです』

鈴音は最後、涙声になって言っていた。しかし、おじさんは表情を変えずに、相変わらず冷静に低い声で尋ねる。

『百年以上掛けて作られた連鎖を、どうやって終わらすつもりだ？』

鈴音は何時の間にか涙を流し、深呼吸してから申し訳なさそうに言った。

『人について……分からない事が多過ぎるんです。まず、人について学んでから、行動しようと思っています』

『つまり、無計画か……』

おじさんは何故か、笑みを浮かべて言った。怒られると思っていた鈴音は、不思議に思って困惑した表情になった。

『無謀だが……面白い。お前を止める気はない。わたしに言えるのは、無事に帰って来いという言葉だけだ』

鈴音はおじさんの言う事が理解できずに、惚けた表情をしている。おじさんは続けた。

『この島から外に出るには、長の許可が必要だ。人間の島に行くための足もいるだろう。これから一ヶ月間は大変だぞ？』

鈴音はおじさんの言葉を最後まで聞いて、やっと全てを理解し、涙を目に溜めながらパツと笑顔になった。

『どつやって行くんだ?』

リアンが調合室で薬を煎しながら言った。鈴音は烏眼の実を鉢で潰して汁を取る作業をしながら、笑顔で答えた。

『鬼イルカの皆に船を引つ張ってもらうの。彼等ならよく人の島に行くし、力もあるから安心でしょ?』

『ああ。それにしても、よく親父は許可したな。人間の所に、何時帰って来れるかもわからねえし……人間だし……』

リアンは聞き取れない程の小さい声で、最後の言葉を付け加えた。鈴音はニツと笑って元気に言ってみせた。

『大丈夫。変えてみせるよ』

『そういや、人間の着物を持っているのか? あいつらの妙に固い衣』

リアンは鈴音のことを相当心配しているのか、母親のように色々なことを尋ねてくる。鈴音は苦笑いをして残念そうに話した。

『うんとね、持ってないの。だから、鬼蚕の糸で作った出来るだけ人間の衣に似せた着物を着ていく』

リアンはまた別の事を尋ねようとしているらしく、ずっと唸って言い淀みながら、遂に決心して真剣な表情で尋ねた。

『いいか? 嫌なら答えるなよ。家族に、やっぱり会いたいか?』

鈴音は一瞬呆けた表情をして、次に困ったように笑いなら、声の調子をわざと明るくして何故か人間の言葉で答えた。

「捧げられた命と見返りに、最高の栄誉を与えよう」

リアンが作業を止めて不思議そうに鈴音を見てみると、鈴音は相変わらず困ったような笑顔で続けた。

『生け贄を捧げた身内にはね、どんな身分でも凄い地位が与えられるの。多分、わたしの家族は、今では上流階級の地域に住んでいるから、旅人として国に入るわたしとは会えないよ』

鈴音のあっさりした口調に、リアンは言葉を返さなかった。

『長が許可を下さった』

卒業式を前日に迎えた冬の終わりの日。鈴音はおじさんの部屋に呼び出されて告げられた。

『人間の世界に行くにあたり、長に挨拶に行かねばならぬ。卒業式が終わり次第、一人で長の家に行くのだ。どんな話をするのかわたしも知らぬ』

おじさんは続けて、一気に話した。その表情はどことなく寂しげだった。

鈴音は薬草の匂いが漂う部屋の中、正座をして考えていた。そして、この一ヶ月間とても気になり続けていた事を尋ねた。

『おじさん……どうして、人の世界に行く事を、簡単に許して下さいのですか？』

この質問をするのに、鈴音は大変な勇気が必要とした。許可を貰った時は嬉しくてただ喜んでいたが、冷静に考えてみると、いくら何でも簡単過ぎると思ったのだ。人間を恨み尽くしているはずの鬼人達が、人の土地に自分を送り込む事に、抵抗を全く感じていない様子は不思議だったし、自分勝手な考えではあるが、僅かに悲しかったのである。

おじさんはまた微笑んだ。この数日の間に、鈴音のおじさんに対する印象はすっかり変わってしまった。普段は滅多に笑わない人なのに最近をよく笑うのだ。勿論その変化を、鈴音は喜ばしく思っていたのだが……。

『お前の未来を、私たちはずっと案じて来た。鬼人のこの島に、人間一人で生きていく事の辛さは、わたし達自身には想像できんものだったろう』

おじさんは自分の言葉に頷きながら言っている。鈴音は黙っておじさんの言葉を聞いていた。

『しかし、お前は負けずに生きてきた。お前は皆が受け入れてくれたと言っていたが、お前自身が皆の、人間に対する偏見を和らげ、お前自身が人間を皆に受け入れさせたのだ』

『それに、お前が真に幸せになるには、やはり、人間が必要だろう。娘の幸せを願うのに、我々の事情は持ち込まぬ事にしたのだ。考えてみれば、当たり前前の事だろう？』

鈴音は心の奥底から、暖かい物が湧いてくるのを感じた。口をつぐんで涙でぼやける視界の中、震える手を必死に抑えながら、一言一言区切って言った。

『わ……わたしは、ここで、この島で過ごせて、叔父さん達と暮らせて、幸せでした。必ず、帰って来ます。その時には、わたしを、迎えて下さいますか？』

叔父さんは鈴音の肩を優しく叩いて、しわ枯れた低い声で答えた。

『何時までも待っている。お前は、わたしの娘なのだから』

鈴音はこの言葉を宝物として、未来永劫大切にしようと決めた。

5 宝の言葉（後書き）

思っていたより長編になりそうです……。しかし、嫌なら見るな
とは言えない……。嫌でも見てくれ！
読んで下さった方、有難うございます。

6 旅立ちの日

雪がその姿を消した春の初め。鬼の島は元の緑豊かな景色を取り戻し、深緑の森や春の植物達が姿を現している。雲間から顔を出す暖かな太陽の日差しが、緑の島とそこで暮らす鬼人達の心を明るく照らしていた。

今日三月十日は鬼人学舎の卒業式である。暖かい風が春の甘い匂いを島全体に届け、自然までもが成人になった鬼人達を祝うように、穏やかな陽気だった。

卒業生七人は、涙を流す者もいれば、胸を張って校長の祝辞を聞く者もいる。しかし、そこにいるべき八人目の卒業生がその場にはいなかった。

卒業式が始まる直前の事である。村長が卒業生達の待機する学舎の教室に突然現れた。老齢の青鬼である村長は、威厳のある長い白髭を胸の辺りにまで伸ばし、顔に刻まれた深い皺を歪ませながら、ゆっくりと言った。

『すまぬが……鈴音、今すぐに、儂の家に来るのじゃ』

村長の言葉に逆らう事は許されない。正装をしたりアンや赤鬼三人組を含む同級生達は、何事かと皆不思議そうな表情をしている。鈴音は渋々同級生達に別れを告げて、村長の後を着いて歩いた。

村長の家は里一番に広く古い。とてつもなく大きな村長の家屋、

その一室で、鈴音は姿勢を正して村長と向かい合い話始めた。

『どうか……なさったのですか？』

鈴音は厳しい顔をしている村長の顔を見て、緊張しながら言った。心臓の鼓動が高まる。

『茶も出さずにすまんの。お主が人間の土地へと渡る日を告げねばならん』

この島を離れる日。皆と別れる日を、鈴音は想像して悲しい気持ちになった。でも、これは自分で選んだ道だ。鈴音は真っ直ぐに村長を見て尋ねた。

『何時ですか？』

『今日じゃ』

村長の思わぬ返答に、鈴音は『え？』と聞き返した。すると、村長は申し訳なさそうに続けた。

『すまぬ……しかし、これは鈴音、お主の為を思つての事なのじゃ……』

鈴音はどこか遠くから村長の声が聞こえるように感じながらも、姿勢を崩さず村長の話を聞き続けた。

『太陽国の人間の船が、島の周りをうろついておる。理由は知らんが、奴等は定期的に来ておるようじゃ。鬼イル力達は、相当に気分を害しておるじゃろう。鈴音、お主は早急に彼等との仕事を』

終わらせなくてはならん。鬼イル力達は、お前もよく知っている通り……気分屋じゃ」

『でも、今日じゃなくても……』

『交渉次第でイル力達は何とかなるやもしれん。しかし、島の周辺をうろつく人間に、農達鬼人がこの島に居ることを悟られてはならん……。そのためには、人間が姿を見せぬ今日が機会なのじゃ』

鈴音はそこで、はっとして声を上げた。

『三日前は……国王の誕生日……』

村長は頷いて答える。

『そうじゃ。奴等は、王の生まれた日に海に出る事はせん。太陽国からこの島まで四日。その間に、お主はこの島を離れるべきじゃ。すまぬ、もっと早くに告げるべきじゃった』

この三日の間に告げる事が出来なかったのは、言い出せなかったからである。卒業という祝い日に、皆と別れなければならぬなんて……。

それでも、鈴音はにっこりと笑うと、急いで立ち上がり、村長にお辞儀した。

『有り難うございます。準備して来ます』

村長は鈴音の態度が意外だったらしく、呆けている。鈴音は村長の広い家を出て、今日別れを告げる事となった、我が家へと急いで

向かった。

家に帰るとおじさんが驚いた様子で鈴音を出迎えた。

『どつしたんだ？』

鈴音は息を切らしながら、村長に告げられた事を説明した。おじさんはその間口を挟まずに、鈴音の話の聞き続けた。

『そうか……そうか……。また、人間の都合か……』

『仕方ありません。それに、わたしはこれで良かったと思っています』

鈴音は一ヶ月前から準備していた荷物を整理して、鬼蚕の糸から作った衣のまま、袋に必要な物を入れつつ言った。

『何故だ……？』

おじさんは怪訝そうに眉を潜める。鈴音は今や、パンパンになった袋を持って立ち上がった。

『ひっそりと居なくなった方が、皆に迷惑を掛けないで済むでしょう。おじさん、わたしが去っても、今日は誰にもこの事を告げないで下さい。せつかくの祝い日なんですから。わたし、鬼イルカのカイン達に事情を伝えて来ます。卒業式が終わるまでには、もう一度帰って来れると思います』

鈴音はそう言うのと、急いで海岸沿いに向かった。

その日の昼。鈴音はカイン達（鬼イルカ）に事情を告げ、急いで里に戻ってきた。しかし、不思議な事に、そこには誰もいない。おじさんもアンおばさんも、誰の人影もなかった。皆、卒業式を見に行ったのだろうか。最後に挨拶をしたかったのに……。

『よう、人間』

鈴音は声を掛けられて、後ろを振り返った。そこには、アンおばさんの白い飼い鬼犬、アードがいた。

『……結局、名前覚えてくれなかったね』

鈴音は、少し笑みを浮かべて、アードを愛しそうに見ながら言った。

『皆、何処にいったのかな……せめて、叔父さんとリアンには、挨拶したかったのになあ……』

空を見上げながら言う鈴音に、アードは、何が可笑しいのかクスクス笑っている。

鈴音が怪訝な顔を見ると、誤魔化すようにアードが言った。

『まあ、人間。鬼人にも事情があるのさ。さあ、この家にも、お別れを言いな』

『どうして、今日わたしが島を出ていく事……知ってるの？』

鈴音が首を傾げて言うと、アードは妙に焦って、何か思いついたように言った。

『鬼犬の聴力は凄いだよ』

鈴音は無理に納得して、『そう……』と微笑み、我が家に向かつて丁寧にお辞儀をした。十年間の思い出を、胸に秘めながら――。

鈴音は長い森をアードと共に抜けた。途中、叔父さんと初めて出会った巨樹にも行き（後でこの巨樹は御神木だと知った）、赤い小さな猛毒の実を見て、懐かしそうに目を細めた。

海岸の小さな木製の船には既に荷物を置いてあり、遠くのほうでは鬼イルカ達が泳いでいる。取り敢えず、浅瀬を出て鬼イルカが泳げる場所まで、小船を漕いで行かなければならない。

鈴音は振り向き、砂浜に座っているアードを見た。

『お別れだね……』

鈴音は泣きそうになり、顔を俯けた。ここに来るのは、自分の運命を悲しんでいた、あの時以来だ。

鈴音は船に乗り込み、櫂を持った。

『人間。イルカ共のいる場所まで漕いだら、振り返ってこの島をもう一度見ろ』

アードが別れ際にそう言った。鈴音はその言葉に疑問を感じたが、ただ『うん』とだけ返した。言われなくても、最後に島の姿を見ようとは思っていたのだ。

『バイバイ。またね』

鈴音はそう言って、櫂で漕ぎだした。中々力のいる作業だったが、鬼イルカのいる場所まで、止まる事無く漕ぎ続けた。

『やあ、鈴音。さあ、俺とケインの角に縄をくくれ』

小舟よりも更に大きな体躯の、鬼イルカのカインが言った。隣にはカインの弟であるケインもいる。鈴音は言われた通り、頑丈そうな二匹の角に、小舟と繋がる太い縄をくくった。

『よろしくね。カイン、ケインさん』

カインは『ほいよ』と返事をし、ケインは無言で、頷くような仕草をした。ここから一番近い人間の島まで二日掛かる。目的地の太陽国へは、そこから人間の船に乗って、更に二日掛けて行く予定だ。

鈴音は小舟の座席に座って、櫂をしまった。そして、最後に緑の島を一目見ようと振り返った。

そこに広がる光景に、鈴音は驚嘆した。

おじさんや、リアン、アンおばさんや、同級生の皆：それだけで

はない。村長に赤鬼達、鬼猪の軍団に友達の鬼鳥も、島中の鬼達が、海岸にいつの間にか集まっている。手を振っている者や、鬼の文字で『いつてらっしやい!』と書かれた幕を掲げている大人達。姿は見えないが太鼓を叩いている者もいるようだ。ドンドンと音が聞こえる。

『無事に帰って来いよ!』

リアンの声がした。鈴音は顔を俯せて涙を着物の袖で拭った。手が震え、嗚咽が止まらなかった。

『鈴音……』

カインが何か言い掛けて、ケインがそれを制した。鈴音は立ち上がって、今まで出した事のないような大声で叫んだ。

『絶対! 変えてみせるから! 皆が故郷に帰れて、皆が笑顔でいれる世界に!』

鈴音は笑顔で、涙を目に溜めながら、手を振った。

二匹のイルカが泳ぎだす。鈴音は島の姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

6 旅立ちの日（後書き）

第一章は終わりです。第何章まであるんだよって話ですが、それは著者も分かりません……。5章ぐらいかな？うん、やっぱり分かりません。

話が進むにつれミスが増えると思います。今回の展開もやや強引ですし。

それでも読んで下さった方、有難うございます。

7 / 帆船の二日

太陽が姿を現してから既に数時間が経つ。雄大な海は波も作らず静かに落ち着いており、天高くから届く太陽の光を反射させて、辺り一面を美しく輝かせていた。

そんな海の中へと、一隻の帆船が小さな島から旅立つ。船は長く使われているのか所々ボロボロで、数十人が乗り合わせられる中型の木造船である。船は帆を高く掲げ、強く吹き付けてくる潮風を受け、止まることなく南へ南へと進んで行く。小さな島からは、直ぐにその姿が見えなくなつた。

「いやあ、オイラはやつと美人な奥さんの所に帰れるよ。」

船に乗っている三十歳代くらいの男達が集団で話しをしている。身なりを気にしない質なのか、無精髭は生やしっぱなし、全員着物は安っぽい使い古された品々で、継ぎ接ぎだらけである。彼等は低流階級の出稼ぎ人達らしい。

「お前の嫁は物の怪だろ。鬼だつて食いやしねえ」

酒を一升瓶で飲んでいる男が言った。三人の煙草を吸っている男達が、下品な笑い声を上げて、その言葉に同意する。

「おおい。そこの兄ちゃんも話そうぜ」

男の内一人が、麦わら帽子を被り、薄い赤色の着物を纏って遠く

を眺めている少女に言った。少女が振り返ると、男たちは驚いて意外そうに声を上げる。

「娘さんじゃねえか。これは悪い。女が乗ってるなんて思わなかったもんで」

「娘さん、これからどこへ行くんだい？ オイラ達の話し相手になつてくれよ」

男達は次々に声を上げるが、少女は妙に慌てて中々口を開けようとしない。

「どうしたんだい？一応言つとくが、俺たちには嫁も子供もいる。へんな事はしやしないよ」

煙草を吸っていた男達の一人が、頑固そうな顔のわりに優しい口調で言った。彼女はちよつと躊躇ってから頷いて、男達の集団にぎこちなく入る。少女は酒の強い匂いに少し顔をしかめた。

「自己紹介してくれよ、娘さん」

煙草を吸っている男が言った。少女は訛りのあるか細い声で答える。酷く緊張している様子が、声の震えから伝わった。

「す……鈴音と申します。が……外国から来た……旅の者です」

男たちが「へ〜」と感嘆の声を上げる。若い娘が一人で旅をしている事に、感心しているらしい。

鈴音は、自分が話している人間の言葉に間違いがなかったか、気

になつて仕方なかつた。

「何して旅しているんだ？……衣は見た事ないような生地だな……」

「衣は鬼蚕の……いえ、祖国の物です。わ……わたしは一応、薬調合師をしています」

男たちは再び感心したと声を上げる。薬調合には当たり前だが多くの知識が必要だ。例えば薬の材料になる植物やその調合法、また各々の症状にぴつたりと効く薬の種類に関してなど……。目の前にいる娘がそんな知識を身に付けている事に感心しているのだろう。ただ、薬調合と言っても鬼人専門だが……。

「薬調合師か……じゃあ先生とは話しが合うかもな。おゝい、先生や」

男の一人が遠くの方で寝ていた、長身で細身の青年を呼んだ。先生と呼ばれた青年は、外国の医者が着るような白衣を身に付けている。眼鏡を掛けていて、いかにも博学そうだ。鈴音は急いで、「初めまして」と頭を下げた。すると、青年は爽やかな笑顔で言葉を返してくれた。

「初めまして……」

しかし、青年はそこで言葉を止めた。鈴音が困惑して辺りをキョロキョロと見渡していると、青年は呆れた様子で溜息混じりに続けた。

「……全く、貴男達は朝からお酒なんか飲んで……医者の言う事は聞いて欲しいね」

医者青年は厳しい声で告げた。男たちは申し訳なさそうに、酒を置いて煙草を捨てた。

「許してください先生。それより、聞いてくださいよ。この子、薬調合師らしいですよ」

青年は男達と同じように感心の声を上げて鈴音を見た。鈴音は緊張して固まっていたが、自己紹介をしなければ失礼だと思い至り、上ずった声で切り出した。

「す……鈴音と申します。」

鈴音のぎこちない言葉に、青年は微笑んで言った。

「訛りがあるね。外国の子かな？それでも黒髪に黒い瞳……両親は太陽国の人みたいだね……」

「生まれは太陽国ですが、育ちは別の国です。久しぶりに、生まれ土地に帰ろうと思ひまして……」

不思議な事に、この医者青年はずっと鈴音を見つめている。あまりに見られ続けるので、鈴音は少し恥ずかしさを覚えて尋ねた。

「あの……どうか、なされましたか？」

青年はハツとして、ずれた眼鏡を調べながら、妙に焦って言った。

「いや、悪いね。何でもないよ。どこかで会った事があるように思

ってね。きつと気のせいさ。僕は医者、の椎名文瀨だ。宜しく」

二人は握手をした。最も、鈴音は握手という行為の意味をよく知らないのだが。

船は時に酷く揺れながら、目的地である太陽国へと向かって行く。鈴音は二日間という短い時間の内に、同じ船に乗る皆と親密な仲間になった。同性も同年代の人もいなかったが、皆見聞が広がったし、鈴音は彼等と話すうちに人間について少しずつ思い出していった。

「鈴音さんは、十年近くぶりに太陽国に入るんだよね」

椎名が茶を飲みながら、太陽国まで残り数時間となった地点で鈴音に尋ねた。

「はい……。どれくらい、変わったのかなあ……」

隣で酒を飲んでいた男がそれを聞いて、酷く酔っ払った口調で話しに入った。どうもこの人は酒を飲んでいなければ駄目な質らしい。

「それはもう大分変わったように感じるだろうぜ。俺達は一ヶ月に一回、交易島の仕事場から帰ってくるんだけどよ、それだけでも随分と周りが変わったように感じるからな」

それを聞いて鈴音は初めて、船を乗り換える為に寄ったあの島の名前が交易島だと知った。鈴音は自分の頭の中にある想像上の地図に、新ためて知った島の名前を刻もうと、交易島・交易島と頭の中で何回も繰り返し返した。その内に椎名が続ける。

「帰ったら、鈴音さんは何をするの？」

鈴音は男たちが釣りを始めて楽しんでいる様子を眺めながら、言葉返した。

「まず、昔住んでいた村に行ってみようと思っています」

話を聞いていたらしい釣竿を持った男達が「それは良い」と口々に言った。

「祭りもあるぜ、今週にな。俺たちはその為に帰ってきたみたいなものだ」

顔を真っ赤にした男が、勢いよく酒を飲みながら愉快そうに話す。

「椎名さんは、何しに行くんですか？」

鈴音は椎名の様子が気になって尋ねた。椎名は「あれ、言ってなかったけ？」ととぼけた様に話してから、男達から無理やり勧められたお酒を少し飲んで答えた。

「交易島の診療所で、薬が足りなくなつてね。太陽国にしか売っていない薬だから、二日掛けて買いに来たのさ。頭痛に効く苦い薬」

「頭痛ですか……光沢草とか、清水香りの実とか使われていそうですね」

「そうそう、他には痛氷の実とか……。正直薬の事は、詳しく知らないんだけど……」

鈴音は痛氷の実と言う植物の実を知らなかった。人間と鬼人では呼び名が違う物も多々あるのだろう。これから先、人間の世界で生きていく為には、まだまだ学ばなければいけない事が多そうだ。人間の常識が鬼人の常識と食い違う事もあるらしく、この二日で鈴音が男達や椎名に変な顔をされた回数は五十回にも届く勢이었다。

「島が見えたぞー！」

男の声が響いた早朝。帆船は二日間の旅を終え、世界でも有数の巨大な島国に辿り着いた。鈴音は十年ぶりに、自分の生まれた国に帰ってきた事になる。鈴音は海岸をこれでもかと眺めた。そこには幾つもの船が止まっている。帆船や漁船、観光の為に造られた物なのか、とても豪華な客船も海岸に錨を下ろしていた。

鈴音は、たくさんの人間達が生活をしているであろうこの風景に心を震わした。全くそれは当たり前前の事なのだけれど、人がごく普通に生活をしている事が、鈴音は嬉しかったのだ。

「いやはや、これでお別れだね」

椎名が残念そうに呟いた。鈴音は重い荷物を手に持って、今までの時間を惜しみながら、椎名にだけでなく乗組員全員に向かって言った。

「また、会えますか？」

男達はその言葉を聞いて、照れたり笑ったりした後、口々に鈴音に向かって激励の言葉を掛けた。最後に、椎名が鈴音の倍はあろう

かという荷物を必死に持ち上げて、必死な表情を無理に笑顔にしてこう言った。

「また会えるさ。そう遠くないうちにね」

船が港に着くと、船に乗っていた皆は、笑顔で太陽国に足を踏み入れた。鈴音は、二日ぶりの揺れない地面に少し違和感を感じたが、直ぐに慣れて懐かしの大陸を歩きだした。

鈴音は生まれ故郷、赤坂村へと足を向ける。

8 故郷での再会

太陽国には中心都と呼ばれる広い街がある。その名の通りこの国の中心に位置しており、国王の住む城郭・太陽城が建てられ、中流階級の者から上級階級の者だけが住む事を許されている街衢である。

その中心都から北に数里行くと北側海岸が在り、低流階級の者達の出稼ぎ渡航に多く利用される。鈴音は馬を借りて、北側海岸から村を五つばかり抜けた所にある、懐かしの故郷赤坂村へと向かった。

赤坂村――鈴音が住んでいた当時は、少々有名な土地柄であった。人口数十人の小さな農村だが、昔ながらの伝統や伝説などを非常に大切にしている、ある有名な学者さん曰く「歴史の宝庫」である。とは言っても当時の幼い鈴音は歴史になど更々興味が無く、近所のお爺さんが子供を集めて勉強会を開いていた時も、友達と関係の無い話をして戯れていた。

なので鈴音が赤坂村について知っている事・覚えている事と言ったら、傾斜に建てられた古い家々と大きな田園、澄んだ美しい川や近所の高い山に登って見た赤坂村全体の風景などである。つまりは、目で見た景色ぐらいのものだった。家族や友達と遊んだ時の記憶は勿論鮮明に覚えているが、あまり思い出したくない。

そもそも何故鈴音が故郷に戻ろうと考えたのか、それは覚悟する為であった。自分の家族が村にいない事ぐらいはリアンに話した通り分かっていて、生け贄になった筈の自分、つまりはとっくの昔に死んでいるはずの自分が、実は生きていると確認されるのも不味い。覚悟するとは……自分には帰る場所が無いのだと実感すること

だ。

鈴音は馬を走らせる。走らせている間に、馬と会話が出来ない事に気が付いた。始めの間は（この子は恥ずかしがり屋さんだろうな）とか、（わたしと会話出来る事に気が付いていないのかな？）などと考えていたのだが、何度馬に呼びかけても返事をしない。漸く言葉を返したと思ったら、

「ひひーん」

である。どうやら鈴音の持つ才は、「鬼動物と会話出来る」であり、「全ての言語を理解できる」ではないらしい。よく考えてみれば、鈴音は幼い頃、人間の土地で動物と会話をしたことなど無かった。

つまり彼女は慣れない手綱で数時間、馬に揺られて行かなくてはならなくなつたのである。

赤坂村に辿り着いた頃には、鈴音の体はガチガチになつていた。馬から下りるだけでも苦勞したし、気を張りすぎたせいか腰が固まつていて強く痛んだ。歩き方も死人のようにフラフラで、もしその場に人がいたら鈴音は不審人物の烙印を押されていた事だろう。しかし、懐かしの赤坂村には人の気配が全く無く、昼だというのに薄っすら霧が立ち込めていて、幽霊でもいるのではないかと錯覚させる有り様だった。

鈴音は馬を馬小屋に置いて（その小屋も蜘蛛の巣だらけで不潔だった。鈴音は一応水だけでも清潔な物を川から汲んできてやった）、妙な歩き方で村を徘徊した。彼女は初め、道を間違えて廃村に来てしまったのだらうかと考えていた。しかし、見覚えのある傾斜に建

てられた家々、澄んだ川や雑草によって支配されたかつての田園地帯、あの赤坂村に間違いない。この十年の間に、伝統や伝説を何百年も守り続けた鈴音の故郷は、廃村になっていた。

鈴音は思わぬ形で帰る場所が無い事を確認した。死んだ村で死んだ筈の自分が歩いているという光景は、傍から見るとさぞ不気味な光景だろう。鈴音は何とも言い表せない気持ちを胸に、かつて自分の家だった建物へと小走りで足を進める。聞こえてくる音は、川のせせらぎと馬小屋においた馬が偶に鳴く声ぐらいであった。

自分の家とその周辺は昔と大して変わっていないかった。ただ、蜘蛛の巣が張り巡らされたり、白蟻にやられたのか所々ボロボロであったりと、時を感じさせる姿ではあったが。

「誰も……いないよね……」

鈴音は一応声を掛けてから、かつては自分の家であった建物の、ボロボロになった戸を二度叩いてみた。当たり前だが鬼人の建物よりも小さく造られていて、鈴音は自分の身長にあっているというのに、その大きさについて違和感を覚えてしまう。

家は思っていた通りもぬけの殻で、昼間だというのに薄暗くて不気味だった。家の中にまで蜘蛛の巣が張ってあったり、ゴキブリがうようよしていたりと、中々に酷い状態である。部屋の間取りは全く変わっていないが、家の空気は十年前とはまるで違い、冷え切っていた。

鈴音は何年も掃除されていない埃だらけの汚い床に土足で上がり込むと、廃虚と化した家の隅々まで見渡して、溜め息を付いた。

村人が誰も残っていない理由には既に見当がついている。鈴音の家族は、娘を捧げて得た地位や金を、赤坂村の人間全員に振りまいたのだらう。世話になっていている人達だし、それは常識的で立派な事なのかもしれない。しかしなんともやり切れない思いである。鈴音は自分を犠牲にして家族が手に入れたもので、皆が幸せになっているという現実を喜ぶ気にはなれなかった。かと言って彼等が当たり前に持っている、幸せになりたいという願いを忌む事も憚られたのである。鈴音は板ばさみの状況にあった。

「でも、どうしようもないもの……」

鈴音は淋しい廃墟の中で独り言を呟いた。考えて出した言葉ではなくいつの間にか口に出ていた言葉だった。なので、何がどうしようもないのか自分でもよく理解していない。

「何がどうしようもないのかね？」

不意に背後から低い声が聞こえた。鈴音は人が居る筈はないと決め付けていたので驚いて振り返ると、そこには歳が七十程の、白髪を後ろで一つに束ねている、一風変わった姿の老人が玄関に立っていた。

「物取りだったのなら運が悪かったの。残念な事にこの村は十年程前に死んでしまったのじゃ。何処の家にも、もう一銭すら残ってはおらんよ」

老人はどうやら鈴音の事を物取りだと思っているらしい。まあ、土足で人の家に勝手に上がりこんでいるのでそう思われても仕方が無いだらう。鈴音が何と誤魔化そうかおどおどと考えている間に、玄関に立っている老人が、昔よく世話をしてくれていた爺様にそっ

くりだと気付いた。いや……そっくりな訳ではない。本人だと思いついた瞬間、勝手に口が動いていた。

「古瀬おじいちゃん……？」

鈴音はハツとして急いで自分の口元に手を当てた。一太郎という名の老人はすつとぼけた表情をして、「何でわしの名前を知っておるのじゃ」と驚いた口調で言った。

(ああ……しまった。なんてわたしは馬鹿なのだろう……)

後悔しても遅かった。一太郎はどこかであったことがあるだろうかと自分の記憶を辿っている様で、自分の顎に手を当てて考え込んでいる。鈴音は自分の体から冷たい汗が出てくるのを感じた。生け贄にされた自分が生きている……これが国に広まれば、鬼人と手を取り合おうなど言う間もなく捕らえられて、サクツと死罪にされるだろう。

一太郎が「うーむ」と唸ると、鈴音はビクツとして体をすくめた。そして結局、一太郎は思い出せなかった……というよりは気が付かなかったようで、鈴音に向かって尋ねた。

「会ったことがあるかね？ すまぬがわしは思い出せぬ」

鈴音は安堵の息をつき、正体がばれなかった事でこれから先に対して少々自身を持った。そして物取りと勘違いされたままでは悪いと思つて、正体に気付かれないようわざと訛りを強くして言った。

「おじいさん、わたしは旅の者です。今までに会ったことはない筈です。それに、わたしは盗人なんかじゃありません。今晚泊まれる

場所が無いか、探していただけなのです」

一太郎は「ほう、お主の様な若い娘が」と感心した様に言った。鈴音は誤解が解けた事を喜ばしく思い、また一太郎に会えた事で嬉しくなった。しかし喜びの言葉は口にせず、心の中で静かに呟いた。

(おじいちゃん……また会えて良かった。でも、ごめんなさい……)

鈴音はこの村から去らなければと家を出る為に玄関へ戻った。一太郎はずっとその場に突っ立っているが、鈴音はそもそも彼は何故この村に残っているのだろうかと思議に思った。それに彼は、何故今は廃墟となった、彼に言わせれば一銭も落ちていないようなわたしの家に来たのだろうか……？ そんな事を考えているうちに、一太郎は愛想のいい笑顔で鈴音に呼びかけた。

「勘違いした侘びじゃ。今日はわしの家に泊まるかの？ ここから直ぐじゃし、今日は元々客が来る予定だったのでな、客人が来ても恥ずかしくない程度には片付けてある。ふむ、そうしよう、それがいい」

鈴音は足を止めた。

9 / 感謝の告白

暗い林道を抜けた村外れにある茅葺の家。昔はその家をお化け屋敷だと言つて、近づく事も躊躇っていたものだ。何故なら周りは背の高い木々に囲まれていて、昼間であろうと薄暗く、建てられてから相当な年月が経っているので、外装がボロボロだったからだ。

鈴音が最初にこの家へと立ち寄つたのはまだ三、四歳の幼い頃だ。冒険と称して友達と村を散策していると、村の外れに古い家を見つけたのである。あんなボロボロの家に誰が住んでいるのかと帰ってから母に尋ねたところ、母は明るく「素晴らしい人が住んでいるのよ」とだけ答えた。幽霊屋敷の主人が素晴らしい人だなんて悪い冗談を言われたのだと思い、夜中にこっそりと家を抜けだして、友達数人と幽霊屋敷へ向かった。

明かりのない暗い山林を通り抜ける事には恐ろしさを感じたけれども、それよりも好奇心のほうが勝っていた。そうしてお化け屋敷の戸を叩き（皆が恐れたので鈴音が代表して叩くことになった）、鈴音は真剣な表情・真剣な声音で挨拶をした。

「お化けさん、お化けさん。あなたは良いお化けさんですか？」

そうすると寝巻き姿の老夫婦がクスクスと笑いながら戸をゆつくりと開けた。小さな子供達が二人を恐れて蒼白な表情で見上げていると、その当時から白髪を後ろで一つに縛っていた彼が小さな声で脅かすように言った。

「いいや、悪いお化けさんじゃ」

鈴音は家から持ってきた数珠をジャラジャラさせて「南無阿弥陀仏！」だの「南無法蓮華鏡！」だの適当にそれっぽい言葉を並べてみたが、恐ろしい事に老夫婦は笑って鈴音の頭を撫でてきたのである。

その老夫婦こそが古瀬一太郎と、当時はまだ健在だった彼の妻、古瀬おたつであった。

彼の古い家は外装も内装もまるで変わっていない。家の中にある外国の珍品やその配置、流れる空気までもが昔から変わっていないようだ。鈴音はこの時漸く、懐かしい故郷へと帰ってきたのだと実感した。

「そんなに珍しいかの？」

鈴音があまりにも家の中をキョロキョロと見渡すものだから、一太郎が可笑しそうに言った。鈴音は結局、一太郎の家に今晩は泊まらせて頂くことになっていた。一太郎の誘いを断り切れなかったということも無くはないが、一太郎ともっと話したいという欲求に負けた事のほうが大きい。彼は博学で見聞も広く、知らない事は無いんじゃないだろうかという印象を抱くほどに知識が豊富だった。話せば得るものも多いはずだし、何より十年振りの再会なのだ。会って直ぐさよならでは淋しい。

まず、一番気になっていた事柄を尋ねることにした。鈴音は一太郎が出してくれたお茶を頂いて（何が入っているのか、お茶はほんのりとした柑橘系の甘味があった）、体を温めてからゆっくりと切り出した。

「あの……この村、赤坂村は昔から伝統を重んじてきた事で有名な古い村でしょう？ 何故住人を一太郎さんしか見かけないのでしょうか？」

一太郎はその問いに「ふーむ」と何か迷うように唸ってから、自分の分のお茶を一杯飲んで答えた。

「そうじゃの、さぞ驚いた事であろう。その話をするにはまず、生け贄の制度について話す必要がある」

このタイミングで生け贄の制度が出てくるということは、おおよそ鈴音が予測したとおりの展開がおこったのだろう。事実、大半は予想した通りだったが一部は予期していなかった。

「生け贄は百年に一度の期間で、ある孤独な無人島に……神住み島と言う名じゃが……とにかく、そこに娘を一人置いて行くという残酷なものじゃ。その娘の家族には莫大な名誉と恩賞金が支払われるのでな、皆がこぞって申し込む」

申し込む……？ 鈴音は聞かされていた話と違うのではないかと自分の事だというのに酷く冷静に考えた。生け贄は国王が見定めた国中の臣民から選ばれるはずではなかったのか……。申し込むという事は、家族が娘の命を見返り欲しさに捧げたという事ではないか。そして、つまりはそれが自分だったという事になる。

「最終的には申し込んだ者の中から国王が選んだ者が犠牲になるのじゃが、その際の恩賞というのは家族だけでなくその娘の出身村にも、家族の許可があれば渡す事が出来るのじゃ。もう、分かるじやろう。この赤坂村にはかつて若い娘が生け贄に捧げられた。その娘

の犠牲によつて、彼らは上流地区に引越したのじゃーどうかしたかの？」

「太郎はぐつたりとしている鈴音に向かつて言った。鈴音は「いえ……何でも」と力なく返したが何でも無いわけが無い。想像していたよりも人間は残酷なんだ。」

鈴音は体に力が湧いてこなかった。全ては偶然ではなく必然だったのだ。わたしは家族に一度殺された身で、国に一度殺された訳でもあるのか……。驚きや悲しみといった感情よりも脱力感の方が大きかった。人は自分の幸せの為になら愛情をバツサリと切り捨てられるのか。それともわたしは家族に……。愛されていなかったのだろうか？ 生け贄の日に見せた母の涙は何だったのだろうか。

「まあ、楽しい話ではないのう……」

「太郎がもう一度お茶を飲みながら言った。そして鈴音はハツとした。何故おじいちゃんはこの村に残っているのだろう。村人全員に与えられたはずである国からの恩賞を、彼はどうしたのだろうか？ 疑問に感じたときには口に付いて出ていた。」

「太郎さんは、何故この村に残っておいでなのですか？」

「太郎は湯飲みを机に置いて（気のせいか涙ぐんでいるように見える）、言った。」

「その娘とわしは知り合いです。まあ狭い村じゃから当たり前のことと言えば当たり前なのじゃが。その子の犠牲から生まれた物で、どうやって幸せになれると言つものじゃ」

鈴音は顔を上げた。一太郎は真剣な表情で続ける。

「犠牲で幸せになるというのは、確かに世の中の心理であろう。人間の進化は犠牲を学び、犠牲に学んだ為の成果じゃ。だからこそわしは村人達がどんな暮らしをしようが到底構わぬ。腹立たしい事ではあるがあの子の犠牲を忘れて生きていくのもよしとしよう」

「じゃがわしはそうならぬ。あの子の顔を忘れぬ、名を忘れぬ、笑顔を忘れぬ。どうせ残り短い人生じゃ。せめて少しでもあの子に報いたい。十年間そうして暮らして来たが微塵も後悔はしてやらぬ」

一太郎は続けて一気に言った。鈴音は、何故一太郎が廃墟となつた鈴音の家に来ていたのか漸く分かつた。おそらく毎日行っているのだらう。楽に生きる事よりも大切な何かがあるのではないかと、一太郎は考えてここに留まり続けているのだ。

そして、それは何よりもその娘の為、鈴音の為を思つての事なのである。

（おじいさん、わたしは生まれ変わったんです……。家族から与えられた昔の名前を捨てて、レインおじさんに付けてもらった名前を名乗り、人間としても鬼人としても生きながら……）

鈴音は暗い気持ちを振り払って優しい口調で切り出した。それは一太郎に対して感謝の気持ちでもあつたし、それよりも大きな気持ちの、この人に幸せになってほしいという思いからだつた。

「もし……わたしがその娘だつたら……」

一太郎が不思議そうに鈴音の顔を見つめなおす。そこに懐かしい

娘の顔をみたのか、一太郎は一瞬驚いた表情をした。

「それほどわたしを思ってくれているあなたに、幸せになってほしいと願うでしょう。過去の柵からぬけて、理屈なんか抜きで、ただただ、幸せになって下さいと願うでしょう。」

「お主………?」

鈴音は目に涙を溜めながら、一太郎に笑顔に向けた。心の底から溢れ出た笑顔だった。正体がばれても、わたしが生きている事を隠して、この人をこれ以上苦しめたくない。

「わたしは鈴音って言います。でも、昔呼ばれていた名前とは違います。わたしは綾乃。音無綾乃って言う名前でした」

鈴音は妙に照れくさくなったが、一太郎は何を突然言うのかと頭を振った。

「うん、久しぶり……一太郎おじいちゃん」

一太郎はその呼び方にドキツとしたようで、ジツと鈴音の瞳の中を覗き込むようにして見た。そしてもう一度頭を振ると、恐る恐るといった口調で言った。

「まさか………」

10 鬼人と人間

鈴音はそれから十年間の出来事を全て一太郎に話した。鬼人に救われた事や、それから鬼達と共に育った事、そして自分の夢の事も。一太郎は複雑そうな表情をしていたが、口を一切挟まずに黙って話を聞いてくれた。鈴音が話し終えた頃には、辺りはすっかり暗くなっってしまった。

「綾乃……いや、鈴音。この事は誰にも告げてはならん。わしに話すべきでもなかった」

静かな夜の廃村で、一太郎が厳しい声音で告げた。鈴音はこくりと頷いたが、後悔はしていなかった。どうしても話さなければならぬと感じたのだ。一太郎も鈴音の気持ちを分かってくれているだろうし、だからこそその警告なのだろう。二人ともしばらく口を開かないでいると、一太郎が急に力なく崩れた。鈴音は驚いて一太郎に駆け寄り、その体を支えてやったが、その必要は無かったようだ。一太郎は臉を押さえてしきりに、

「良かった……良かった」

と涙声で呟いていた。鈴音はそんな一太郎の様子を見て遂には涙を流してしまい、それを誤魔化すように笑顔になってから、「はい」と元氣よく答えた。

「いや……しかし、喜んでばかりもおられぬ。お主は何故鬼人の島に住み続けようと思わなかったのじゃ？ いや、夢の事は先に聞いたから分かっておるとも。それにわしは、そのおかげでこの十年で最高の日を味わっておる訳じゃが……それでもやはりお主にとって

は、鬼人の島で生きていく事の方が幸せではなかったのかの？」

一 太郎は最後に「苦しみは分からぬ事もないが……」と付け加えて言った。鈴音はううんと首を横に振って、鈴音としてではなく昔の自分、音無綾乃として明るく話した。

「わたし、たくさん経験をしました。それで気が付いたの。人も鬼人も大きな違いは無いって。お互い歩み寄れない状態が続いているけれど、少し流れが変われば、直ぐに仲良くなれるはずだって」

一 太郎は納得出来ないようだった。というより、鈴音の夢は到底誰にも理解すること何て出来ないのかも知れない。何故なら今生きている人間も鬼人も、お互いが敵であるという事は口を挟む必要すら無い程に、常識的な事なのだから。

一 太郎は言い泥んでいる様で、口をモゴモゴさせていた。鈴音が首を傾げると彼は話す決心が付いたらしく、鈴音を真っ直ぐに見つめて言った。

「綾乃。お主、人間と鬼人の関係をどれくらい知っておる？」

鈴音は綾乃と呼ばれると少し困惑するが、顔には一切戸惑いは出さずに一太郎の質問に答えた。鬼人と人間の関係についての知識はたくさん持っている。学び舎での歴史の試験は常に満点だったし、昔はよくレインおじさんや村長の書物庫に勝手に入り込んで歴史書を読み漁ったりしたものだ（勿論、後でこっぴどく叱られた）。

「二百年前から鬼人と人間の交流は始まり、両者は良い関係を築いていました。お互いの知識を交換したり、物質の輸出入も頻繁に行われていました。今では数多くの国々が立てられたオールドビスと呼

ばれる巨大大陸に鬼の種族達は暮らしていましたが、人間はオールドビス大陸にあるたくさんの資源が欲しくなり、鬼人を追い出そうとしました。当然、それから二つの種族は関係を悪くします」

「結局、種族間の争いは増大して行き、最後には百年にも及ぶ戦乱が起こりました。つい三十年前まで行われていた大きな戦争です。戦争には人間が勝利し、鬼の種族は大規模な引越しを行いました。この大きな争いのことを「百年戦争」と言います。鬼人の犠牲者・人間の犠牲者を合わせると、計二億人……」

鈴音は暗記していた事柄をスラスラと述べた。一太郎はそれまで黙っていたのだが、鈴音が話し終えたとたんにこれまたスラスラと話し出した。

「しかし、鬼人の一部には戦争の敗北を認めたくない者達がいまいた。彼等は人間の世界でひっそりとくらししており時折、世界の各地で組織的暴力を引き起こします。彼等は「人喰らい」と呼ばれ、恐れられています。彼らが引き起こした組織的暴力による犠牲者は延べ数百万人に上ります」

一太郎が話し終える頃には、鈴音の顔色は真っ青になっていた。鬼人が人間を今でも殺し続けている……そんな話は初耳だ。争い合っていたのは昔の話ではなかったのか……？ 信じられない……信じたくない気持ちだった。

「信じられぬか？ しかし事実じゃ。そう、事実じゃよ綾乃。お主の夢というのは、非常に難しいものになっておる。百年戦争後、共通の敵を無くした世界中の国々はバラバラになった。その上「人喰らい」じゃ。その組織的暴力の狙いはある意味お主と同じかも知れぬが、やり方に問題がある。人間達は……わしもじゃが、鬼人に偏

見を持っておる」

鈴音は俯いて言い淀んだ。世界は思っていたよりもややこしくて難しい……。自分の見聞の狭さに歯がゆさを感じた。そして同時に心の底で悔しく思った。仲良くするという事は、こんなにも難しい事なのだろうか……。？ それでも……。

「それでも、わたしは……」

鈴音が呟いたところで、一太郎が頷きながらその歳にしては立派な逞しい腕を上げて制した。

「綾乃、人を学ぶのじゃ。鬼人については誰よりもよく知っておるじやろうが、人間というものは非常に複雑じゃ。丁度、人を学ぶにはいい機会がある」

鈴音が一太郎の言葉を理解できないでいると、誰かがこの家に訪ねてきたらしく戸を叩く音が聞こえた。こんな時間に、この廃村の外れに誰が来たのだろうか？ 一太郎は「来たかの」と言ってお客に向かった。鈴音は、一太郎に泊まるよう勧められた際に「今日は客人が来る予定だ」と彼が言っていたのを思い出した。

「遅かったの」

「そう言わないで下さい。それでも急いで来たのですから」

鈴音は思った。あれ？ この声には聞き覚えがある。客人は一太郎に案内されて鈴音のいる客間までやってきた。客人は鈴音を見かけると、また鈴音はその客人を見て、揃って「あっ！」と叫んだ。

「鈴音さん!？」

「椎名さん!？」

お互いに顔を見合わせてから一瞬間を置いて、同時に笑った。一太郎が「何じゃ? 知り合いか?」と惚けたように尋ねたが、鈴音はこんな偶然があるものなのかと可笑しくて、一太郎の問いに答える事が出来ずに笑い続けた。

椎名がようやく笑い止んで、それから言った。

「いやあ、直ぐに会えるとは言ったけれど、その日のうちにまた会うとはねえ」

鈴音も笑い止んで、目に浮かんだ涙を拭ってから言葉を返した。

「本当に、凄い偶然ですね」

一太郎は一人だけ置いてかれたような気分を味わっていたらしかったが、二人が帆船で出会ったのだと椎名が説明すると、これはむしろ好都合だと言って笑った。

「各々不思議がつているじゃろうが、まあ綾……鈴音、わしと文瀬は親戚なのじゃよ。文瀬、わしとこの子は昔からの知り合いじゃ」

「成る程。いやね、鈴音さんと初めて会ったときに、どうもこの子には見覚えがあると思っただんですよ。昔この村で、面識はなくとも出会っていたのかもね」

鈴音は少しドキツとしてから頷いた。椎名は愉快そうに未だ笑顔

のままだ。一太郎は「ふむ」と呟いてから、年長者らしく中心となつて話し始めた。

「今日は全く良き日じゃ。もう夜は遅いが、三人で楽しく飲もうかの」

とは言つても椎名は酒をほとんど飲めないらしく（帆船での二日で判明した）、鈴音は人間の酒と言うものを始めて飲んだがどうにも舌に合わなかった。結局一太郎が一人で次から次へと飲み明かしていたが、鈴音はこれ程に楽しい夜を久しぶりに経験して、とても愉快的気分になった。

眠る直前、鈴音は湯浴みをした後一太郎から与えられた六畳ほどの一室に一人寝転がっていた。今日はたくさんの事が起こつた。酷く傷付きもしたが最高に楽しい日でもあつた。それでも鈴音は「人喰らい」と呼ばれる組織の存在が、中々頭から離れなかつた。

10 鬼人と人間（後書き）

第十話です。いやあ、何事にも飽き易い自分が二ヶ月間小説を書き続けているのは、何だかんだで進歩と言ってもいいですかねえ。

いや、作者はアクセス数一でも喜ぶような奴ですので、やはり皆様のおかげです。皆様がチラッと覗くだけでも作者はモチベーションが上がる上がる。

週一ペースは乱さないの、これからも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160w/>

怨恨の崇拜者

2011年10月30日03時18分発行